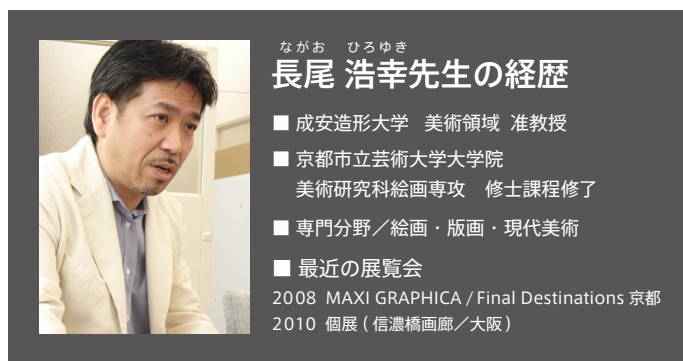


第1回 成安造形大学 長尾 浩幸先生



長=長尾 浩幸先生、齊=京都アートスクール齊藤 陽子

長尾先生の学生時代とその後の活動

齊) まず、このインタビューの主旨からご説明したいと思います。芸大へ進学するという事は、生徒とその保護者の方々にとって想像のつきづらいところが多く、「入試について」「就職について」など不安や心配も多いものです。そのような問いに対して、意義のある返答をしていきたいという考えで始まったのが今回のインタビュー企画になります。将来への不安や心配は確かにあるけれど、美術やデザインの分野に進学する「価値」も確かにあることを伝えたいと思っています。今日は成安造形大学の長尾先生に、「社会と美術」や「受験」に関してなどお話を伺ってみたいと思います。

長) よろしくお願ひ致します。

齊) 長尾先生はご自身の大学時代、どのようなことを考えて過ごされてきましたか。

長) 学生の頃から自分の表現がどうあるべきか、芸術作品がどのように社会の中で評価されて、作品の意味が今の時代や次の世代にどう問いかけられているのかということ真剣に考えていました。芸術が現代社会の中で何を求められているのかを考えざるを得ないと思うようになりました。それは常に自分が持っていることで、その問題意識がずっとあるから、今日まで芸術の道に携わっているのだと思います。

僕が大学にいた80年代は、これまでのモダニズムを批判して行き詰まりを克服しようとする動きがあって、ものを深く考えて概念的に捉えようとする芸術運動がありました。「新表現主義」「ニューペインティング」とか呼ばれたものもその一つで、表現の方法が多様化していました。大きな主題があってそれを表現するというよりは、自分の内側にある問題を拡大解釈してそのままぶつけてしまうような動きですね。彫刻家だから彫刻らしくなければいけないというようなくくりがなく、どんな素材や方法をとってもよい。それがその時代の潮流になっていました。僕も影響を受けましたし、どのようにして独自の表現を獲得できるかが課題でした。同時に「自分たちの番が来ている」「自分たちが変えていこう」という意識や熱い思いが強くなりましたね。

齊) 今、どんなことを意識しながら活動されていますか？

長) 社会の状況は常に変わっていきます。自分だけ高いところから時代を俯瞰することは不可能です。流されたり、反発してみたりする中で、自分がいまここにいることを意識するっていうことが必要です。僕らの時代は情報が限られていた。今はインターネットが普及して、いろんな情報を得ることが出来ます。こういった中で、芸術・デザインの価値観というのは昔と同じというわけにはいかない。19世紀を思い出してみても、産業革命があって、人々の暮らしぶりや価値観が変わったり社会の仕組みが大きく変わったりしていく中で、芸術のあり方も問われたと思うんですね。いち早く産業革命を取り入れ、工業化し経済発展を進めた国が今現在先進国になり、国際社会の中で力を占めているわけです。芸術もそういった動きと必ず結びついています。

齊) そうですね。「自己表現」と言っても、必ず社会の情勢と結びついている。逆に言うと芸術で表現することが社会の情勢にも影響を与えます。

長) 小・中学校では美術の時間は縮小される傾向にあり、義務教育の中でどんどん美術の時間は無くなっています。かつて20代の頃に高等学校の講師も経験していますが、美術が選択授業となっている学校もあって、学ぶ機会を失った生徒も多くと感じます。こどもの時や思春期の中で、芸術に触れる時間がなくなって、美術を専門に志す人も少なくなっているこの状況は心配です。20代の終わりくらいからは絶えずそういうことを意識するようになりました。自分が発表するだけでなく、役割分担が出来るといけないかなということ意識するようになりました。つまり「自分の制作」という考えから、「社会の中での役割」や「社会とどう関わるか」ということを意識するようになりました。

齊) ずばり社会の中で芸術が担える役割ってなんなのでしょう？

長) 人間が成長する上で芸術というのは重要な役割を果たせると言えます。表現活動はいきなりビジネス、つまりお金につながるものではありません。芸術というのは哲学であり思想、要するに生き方になっていく。規範やモラルに対して意義申し立てをすることもひとつですが、ただそれだけではなく、新たに自分で枠組みを提案し、新しいルールをつくりそこに生まれる価値を考えるようなことも芸術と捉えることが出来ます。我々が日常に使う道具にしても、工学的なもの見方だけではなく、自然の有機的な形態や構造を観察し、そこからいい意味で不確かなものや曖昧なものをどう抽出して再構成できるか。そういったことを通して、もつと私たちにとってフィットする価値を創造することができる。その点に芸術という分野が役割を果たせるところがあるのではないかと思います。芸術を学んだからこうなるっていう風に直線的なものの捉え方をするのではなく、企業に入る、教育に携わる、家庭に入って家事や育児をする、そんな様々なシチュエーションの中で、「ある一面を芸術はフォローできる。」そんな捉え方が必要なのではないかと考えています。

齊) 私は直線的な「解」を求めていた気がします。たしかに物事はそんなに短絡的には成り立っていない。きっと安心したいからそういう思考になるんでしょうね(笑) 先生のおっしゃる「多面

的なある一面を芸術が担える」という感覚は新鮮に聞こえます。



成安造形大学での教育

齊) 成安造形大学では、どのような指導をされていますか？

長) 成安造形大学は、入学後、1年次に領域横断型の授業が選択できます。1年次終了後にコースを選択し、より専門性を高めていきます。またSPP(成安パーソナルプログラム)といって、一人一人を見ながら、その生徒が求めていることはなにか、どうしたらその生徒が発展していけるかを教員全体で議論していくようなプログラムがあります。そうやって大学がバックアップしていく中で、自己実現していくにあたっての備えをしっかりと身につけてもらいたいと思っています。広範囲に研究していくと同時に、自己の内面を掘り下げることも。これは口では簡単に言えますが、なかなかむずかしいことです。芸術は、スポーツのように明確な結果が見えるものではない。授業の中では、「作品にどう向き合ったか」という点を見ますね。作品は本来出来上がったものでしか見てもらえないものですが、授業の中ではその過程を見ます。過程を見ていると、予測もつかない新鮮なものが偶然生まれていたりする。本人は偶然出来たものだから価値には気づいていない。むしろ失敗したかと思ったりする。授業の中では、偶然生まれたものの可能性を引き出すような投げかけもします。投げかけの繰り返しです。最初から答えが決まっているような方向付けや枠組みを決めてそこに持っていくというのは無理がある。ひとりひとり生徒の持っている個性を観察して活かすことが我々の役割だと思っています。

AO入試や実技入試について

齊) AO入試も体験授業を通して生徒と教員がお互いに知り合っていく入試ですよね。まさに過程を見ていくような時間が重要視されている。AO入試をされるときに、心がけられていることはどんなことですか？

長) AO入試では教員からの投げかけに対してどう応えて表現に結びつけようとしているか、つまりコミュニケーションを通して作品をつくっていく意識があるかが大事です。その意識があれば投げかけも成り立つので、その子の持っているいいところも引き出しやすいんです。その子のいい部分を見出せたら、「どう活かしていくってあげられるかな」「大学に入ったらもっと伸ばせるな」と

いう風に感じられるものです。自分の気持ちを言えなかったり、複数の人と関わっていけない子もいるんですが、物づくりへのこだわりがあったり、絵や表現が好きだという思いがある。それをなんらかの伝わる形にすることが出来ていれば、そこはしっかり評価したいと思っています。

齊) askではAO入試の対策授業があります。授業をしていて思うのは、自分の考えはジャッジされるものではなくて受け入れて伸ばしてもらえなものだと生徒のみんなに知ってほしいということです。もちろん依頼心だけで質問してくるのはよくありませんが、しっかり考えたことをオープンにしていけることで、次の展開がある。その感覚は今後の社会生活でも欠かせないものだと思います。

長) 早い時期からそういったコミュニケーションのトレーニングをしていくと、AO入試での緊張や壁も取り払われやすいですね。

齊) 一方で推薦入試以降は、実技入試も行われますよね。AO入試で問われることも本当に重要な事柄ですが、デッサンや色彩表現にはどのような価値があると言えるでしょうか？

長) 受験時代のデッサンや色彩を通して造形の基礎として学んだことは、大学の授業で活かします。基礎的なデッサンにしても「描ける」ということは、ものの見え方やあり方を知る機会になります。その技術はアニメーションやマンガの世界でも応用されますし、構造を捉える力が早い段階で身につけていけば制作内容も変わってきますからね。

齊) AO入試で大学に受かることは問題ないけど、そのあとの半年間デッサンや色彩を学んでほしい。askに通学する大半の生徒は、AO入試後も実技の必要性を感じて受講し続けてくれますが、中には受かったことで辞めてしまう子もいます。大学の先生から、実技の必要性を伝えてもらうことが重要だと感じます。

長) もちろん、大学でも伝えています。予備校は、高校の授業でも学べないことを大学に入る前に準備する機関としてしっかりとした役割があると思いますよ。

齊) askはその位置づけを意識して、通ってもらうに値する教育機関になろうとしています。さて、最後に今から芸大を目指す人たちへのメッセージをお願いします！

長) それぞれに思い描くいろんな希望や夢があると思います。「つねに社会は新しい才能を待っている」と伝えたいですね。ちゃんと叶います。ただ叶えるには、志を高く持ってなければ続かない。志を持って、くよくよせずに、足を踏み入れて欲しいですね。一緒にがんばっていきましょう。成安造形大学で待っています!!

齊) 長尾先生は教育熱心だとお伺いしていましたが、実際お会いして、知識や経験を通した骨のある教育への熱をお持ちであると実感しました。本日は良いお話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。

(2011年5月25日 収録)

ご意見やリクエストがあれば、webmaster@artschool.co.jpまで。